12 月23日（水曜日）「行いのある信仰を」

【新改訳 2017】

ヤコブ　　2•14－26

「私の兄弟たち。だれかが自分には信仰があると言っても、その人の行いがないなら、何の役に立ちましょう。そのような信仰がその人を救うことができるでしょうか。」（14 節）

ヤコブのこのことばは、時々誤解されるようです。ヤコブは、信仰によって義とされ、救われるという福音を否定しているのではありません。

アブラハムは神を信じた信仰で義と認められたが、彼のその信仰は、神のことばに従うという行いで表されイサクをさえ祭壇にささげたように、真の信仰に伴う行為があると教えているのです。

行いに表れない信仰は、頭だけ、口先だけの信仰、死んでいる信仰でしかないということです。私たちの信仰はどうでしょうか。

ある男の子が、友人と聖書の新しい訳について話していた時、「母の訳」が一番好きだと言い、その理由について「母は、

聖書を生活の中に訳して、一番説得力があったから」と言ったそうです（D・C・ハスキン）。行いのある信仰だったのです。

～祈り～

主よ。私たちには、信仰に行いが伴っていないことがあります。信仰告白と生活が、実際的に一致できるように成長させてください。

【学びのために】

例に出てくる男の子の母親のように、「聖書を、自分の生活の中に訳している」と言われるような信仰者となりたいものです。「行いのない信仰」の別表現＝「頭だけの信仰」「口先だけの信仰」「形だけの信仰」など。要注意です。